浅草寺志

十二

内閣文庫
和書 類
二二七一 號
三り 冊
九二 函
一五 架
二十𐂂

内閣文庫
番號 和 22711
冊數 30 (12)
函號 192 306

国立公文書館
National Archives of Japan

浅草寺雑簿寛保三癸亥年八月廿日

一三之宮右之社造立之儀、本人川氏年代申上ル、九ヶ之本社破損修復
修覆仕度段御伺申上候処、被仰渡候者、神躰之宮所取南山境内社領
建之右之修理被仰付候、右之宮右之社奉外ニ付申出候
相成候上之儀者、右山西南之隅ニ空地有之候而、右場所
之内ニ而切入候廿間余地形場所之、右相極右之場所付候而、右之場所

十月十六日
一大社善法院成就ニ付今日遷宮之儀式仕ニ付就之石川式
年番東上田明院役者院家並東社出席、役人
徐若衆出仕、遷宮法楽執行有之候

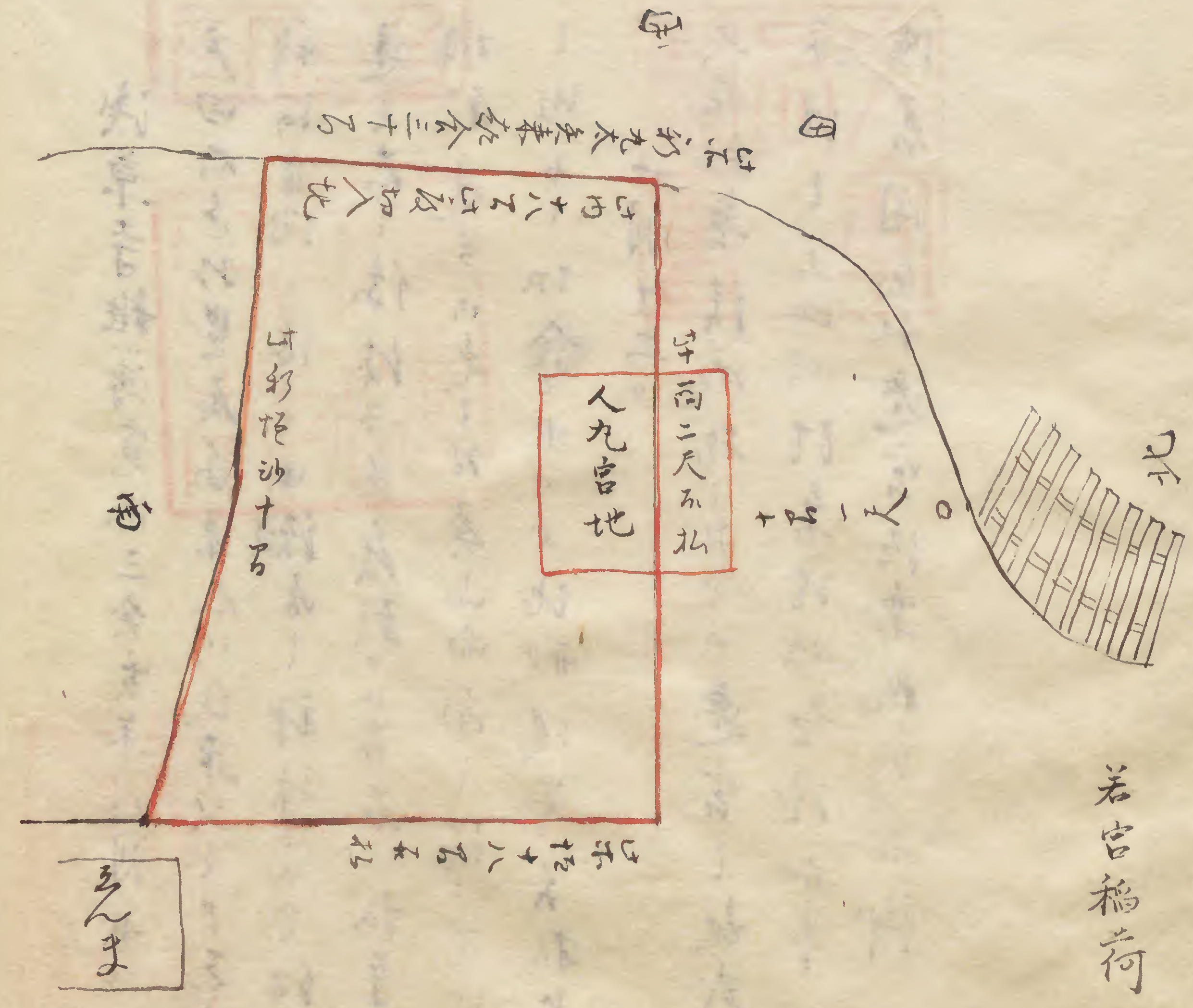
朽木文庫
内一〇九〇七號
内閣文庫

拾

内26

若宮稲荷

千本桜場所



東

柿本祠碑 丁丑高 二尺八寸 横三尺二寸 厚一尺 礎

高一尺四寸五分 銘左の如し
浅草寺柿本祠碑　藝惟柿本神者人丸之英霊和歌之聖
宗石州高角峯播州明石浦皆有祠祭祀朝市所景仰古今
所為忘千載昭徳輝滋彰矣石川子源年恒嗜和歌敬斯
神有故進獲霊像是古詞客頓阿自刻霊像有日係之一世
四百年之過恒不堪幸感晉宇浅草寺新宮一祠安斯霊像
輝神像於永世建碣鐫銘無由子不朽云銘曰南朝老和
歌、神詞林栄萬春飛影於浅草寺和光千東都人一宇祠一
片石傳耀灼爍寛保四年甲子春正月　琴臺紀共志撰鳳岡
関思恭書
発句碑
高三尺七分 横一尺三寸七分 厚六
寸八分 礎二重共一尺三寸 銘云碑や八十年のはくはお
涼しさや須磨咲しもの皆　右貞月宗匠はりぬ 先代

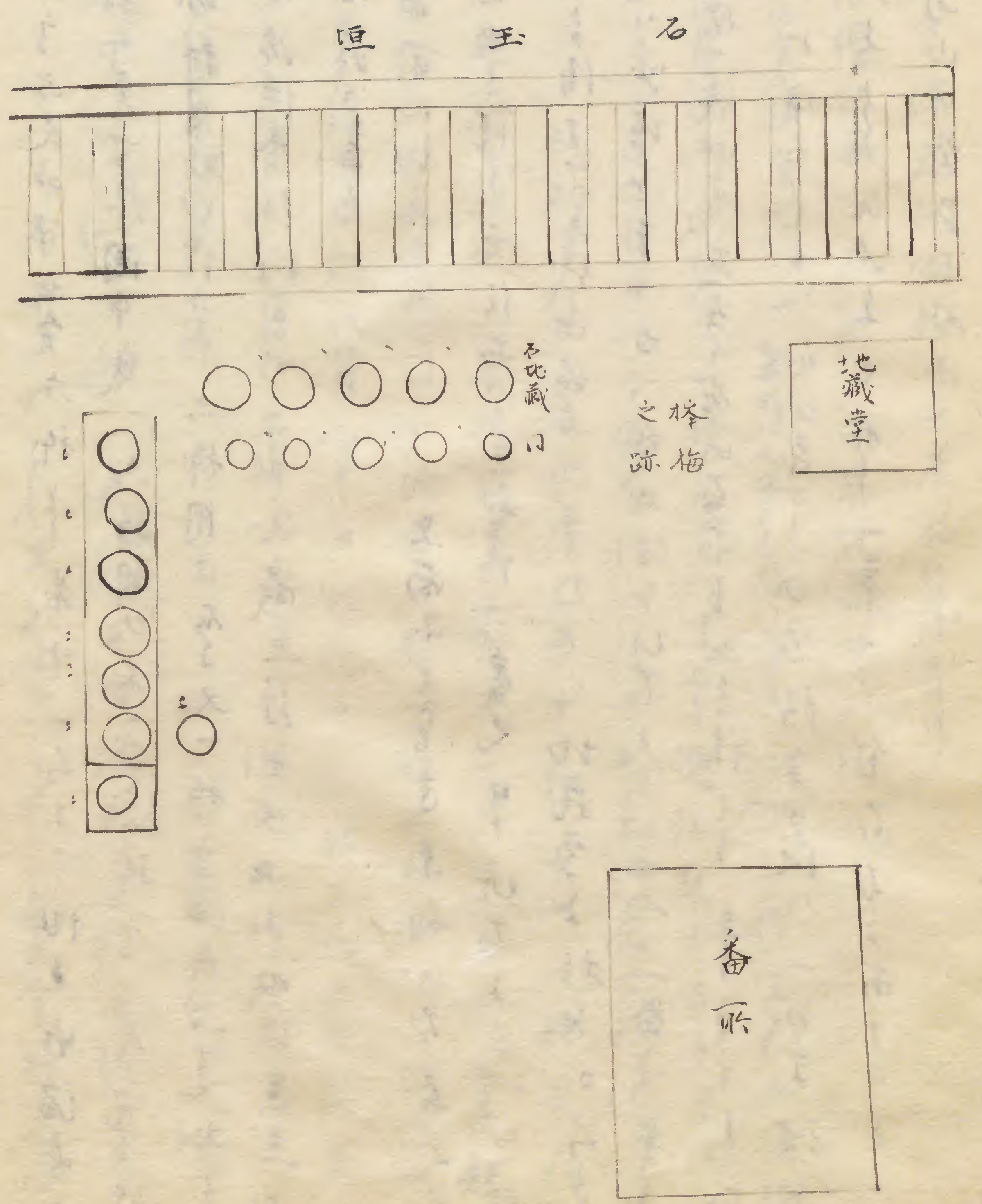
去るうちにむかしよりえらるいう此叢 乾什宗居九卯年
如月十七日 霽一叟 辛社宗匠十一巳天仲冬十七日 立
意記 折節一桂 造立玲重瀧宗匠 左京 補助 還子即井
宗哉 五風 宗湖 薫宗 米町 乾利 花霽 桃水 星障季
散 梅窩子 石鬼 遊一 始蒼葱 洞水 蕪宗 中庵 青什盤
宗沙 連十 五芝 飛衆 金陵 扇畦 尹智 来東 文郷 季
大寸 松秀 成宗 青宗 溪宗 茂宗 箕宗 架宗 桑亀 字正
朔 允文 宗人 日旭 岩外 宗輔 鬼頂 宗哉 方信
梅子俳諧績飾集に見ゆ 乾什ハ俳諧點名 享保の頃
俳門の住来の其治湖の門人にて 和名を呉丈といふ子蔵児
といふ文も世音路 秀竹好人作りし享保の頃浅草俳門に
住し俳諧に號呉丈 乾什河東と名をしく 河東節の文
をあむ 絶ゆし 俳好人 作とあるハ皆 乾什か文之係(蓮)

菜汲む灘 東京茂かあつ つくれるとぞ いの字扇 享保十九年かゝりし納 江の島売
万蔵水調子 玉菜退居 花うるみ 同来退居 此会石にあるべし 氣汁
小まち法師の門人にて御名を呉文といふ子蔵兜とも
安永元辰九年二月十七日 浅草境内人丸社の前に
梓世の句をしるし石碑なり
巴江舎の碑　高さ二尺五寸 横二尺 二十 碗有
一人のみ諸利月やまつ海山路又と母　巴江
因果地蔵堂
丈八寸ハかりとも 或は因果地蔵とも　高サ半 四尺 四方石像之長四
二丁菜石のありしに於ゐ 竄（イガ）志人まず見れは我退去
の因果によりかく文辞に生れつきしといふ口惜
ある 菜石の人くあきれはてて車を挽くあるくゆりかの蹤
志北しられを菜石家会行し ちゃう 葬てやり邑法の営

挽のうめとく北の生前よりいし集つる浅の北に ならるまで
門下北梧の下に石像此地蔵をたてしよし又化身めら
西方のる柏を安つるといひしの梅の朽株のこりあらしに
大木にて又傍法院北方なる梅の高さなくも枝あらし
さはに一説に此地蔵堂むかしは二王門の傍に梓あまたありて
諸人のまなかりて或は人にもすきものも踏（ふみ）なしと志かけたる
事の因果なる地蔵といふもの自ら因果地蔵といひしなり
もしとて又一説にはさも地蔵堂にかくるもの東石此
車を廻せ来と云類とかくる時めくりてまなみ此石にて志
かりいし廻新地蔵と云あやまりて因果地蔵といふ小谷近余りの地蔵堂なり 花まり ひかしに
此車あらしとて 安西氏 回正 かれのうろうし
車十一 地蔵堂はれかくうしろ至 此地蔵 者を了新をうゐるもの左室に施を娶り てをて利出銭の此ををのこく天井のうらにもう
其一名奉納 奈良石 正三郎 天明六年丙午五月吉日
石手水鉢 高二尺三寸八分 横一尺五寸八分 高さ 長さ尺一寸

六分銘奉納明和九壬辰天九月吉日
右像地蔵十九躰　同界地蔵半北南
西の方五躰東西上ヘ一躰三尺八寸あり　礎共下ハ　一躰三尺五寸礎
後銘深川池田氏　一躰三尺六寸あり礎銘慧雲童子享保十
七年壬子五月廿八日　圓誉松古信士　延享四年丁卯十一月
廿二日　知幻童子　元文四年己未十一月十日　一躰三尺七
寸礎銘先祖代々菩提　延享五辰天二月廿四日　関口氏親縁
裏銘□□十四日□　如法華大姉□□三月廿八日□□妙竜
日甚信女□□八月二日　日性信女　一躰三尺五寸銘寛政
四壬子年閏二月　五躰の内ニ小像又五躰あり　一躰
一尺二寸七分　一躰　一尺五寸　一躰一尺五寸五分　一躰一
尺四寸二分　像計　一躰一尺八寸七分銘我々の見ゆ法の光ニ
つゝきいてたれやとれまよひこゝろを　南の方六躰ハ西上ニ並

小なる三尺四寸五分六躰とも花せし一石ニて作る如法無七
尺なる九寸銘園本氏　六躰同のうち又一躰なる二尺四寸礎
銘耕月経田信士　六躰同のうち又一躰なる四尺六寸五分
礎銘信誉紀西上天明二壬寅歳五月廿日　右戸田氏造立　右
是浅ニ慕ひ
青覧　地蔵半北　五南ハ去る寺東西ニ並ぶ人見
見五ツ清と云信不ハ玉絡縄の裏を日く材不ニ出つゝと紐
五ツ清まて五代材縁をつゝむとこ　地蔵尊の形をかくる
人ハ必坊をまとめ入替の坊を材不ニて　古ふより一箇ニ集り
一抔銭四文宛より廃ニ材画不も五ツ清ハ　立そぶすりて本
坊れ勝ありしとこ　塞銭ハ上所ニ出る　化地蔵なる　の宝珠多き所ハ　一日ニ諸売
〆文より小く人立もあり一年ニハ金百両ニあまりしと云
高山の繁昌ニ於てても志るべし



大仏山　二王門の外東の方に老女弁天の堂あり山ハ紫
の色を本とす仁王門の外稲荷社東の方より大仏を安置し
まつりしとつきくる山なりと云　老女弁財天堂
十丈ほどの方ニ近頃平山を築上の石像を安置せし七十五年
大仏山の上ニ在　末社　二百年より三百年ほど土蔵造
修復三百年二百年土蔵造　修復の内　額弁財天　隆盛　額　維比大　弁天の左大黒の右毘沙門の像を安置
師様令字　右寄上　額弁財天木比利書令字一竹堂木時水敬啓
鋳口縁奉掛御宝前延享四卯三月由良清小良清長太
郎孫七利右衛門文右衛門新良清三四郎惣八仙助与兵
衛に右衛門長良清用助林良清　鋳口銘享和二壬戌八月
吉日ひさ
弁財天像ハ慈覚大師の作にして白髪の像之よつて老
女弁天と云　木像長八寸五分　又銭瓶弁天　ともいふ　相州兵乱記　一名関東兵乱記　大
永二年九月の初め古河の御所へ供奉す伏見ハ富

永三郎左衛門尉とて先へしを頼みて冨永武蔵の識字
入来語しけるにそのかみの観音の像ゆゑにて十八日の中なる
るに常より人群集せり殊更不思議なる事ありて弁天の重
の跡より残滴あることなりしと傳ふれども判しかねども
来語の人これを不用多けれども写形もさいの思をと
なし殊参して後けるを云ふ冨永氏綱と初めまり諸人不思
議と云ふ事に遂参詣披集なりて永光の面にけむを語りて
へは遠方語りけるは彼識字ちまさに仁王廿八代桓武天皇
の宝居二戊年建立之本尊は聖観音関東最初の伽藍
霊験無双の事なり種々の旧記不思議の記ニ載す不可称
計彼御本尊上方の蔵墟より水中より浮出させ玉ひける
形をかくる事は三世の仏形を汁へわか冥感慈月の眼
に清らより甚し云へは疾風ノ身に入か如し宗弁才天とと

中ハ則諸多の大士なり八幡社異光者なれは観音の総
称く三光天子と現して威光を方々に耀し八大竜王と
為して恩波を四海に流かす福徳無智の本尊なり武勇最上の
霊神なり（とあるは記述年久く民家に安置しの後太道大師の霊影を画きし絵図の切紙あまたし福原海岸の時ちの以写し）これを見る人
民写出なりつし就中弁財天は観音の化身なり小条氏
守護神なり新造（弁才天 大蛇）の鋒となりやは南面なりは孫文以崇
一同本中并信人の崇敬尊く深く諸き信じ南北翊従の大名小名は
有の貴賎僧俗彼識字ちく種々の献納
城より人は城小田原城の内く殊法事を以てこれの施
の弁財天に移しまた当城の鎮守と崇め奉て武運の長
久をいのられたるも弁天の霊光なり（小条寺氏江戸にも是を称しける）
移りしかれは江戸砂子にいふ大仏山といふ児女弁天を
崇めしといふ
又識瓶の弁天と云小条氏綱の信写取なり清章か識を

日本政府図書
内閣文庫

ゆかりの石之寛永三弁天ハ江の嶋相州亦絶景画像
之再校の所に写ありけるを載て白浅瀬出せるにハ行けす
浅の入し額を掘出しけるときにも又前板にも然とも
當所浅瀬の事は浅場弁才天なり此号ハ宇賀女弁才天な
の山乃浅場ともいふへきなれとも浅場も此弁才天な
りや 山名浅間武蔵志に小泉重喜紀の文強載せて
云或人之説に此弁才天のおこりは真土山人といへるいふ
なりし寛つなりけす信し此を浅瀬弁才天と申侍り宇
女弁才天と申ける此東叡山御門主の浅草の額を宇女
弁才天といふ之額かけしかとハ名におはせるなり
此山をも大仏山といふなり 但の松にある東瀬名貞
頃云浅草弁才天元二ヶ所にて寛文年中紀青坑内の写
又は西の方稲荷のうしろに一ヶ所あり延宝年中の図

又は二ヶ所にて右の方稲荷のうしろに一ヶ所又呉山
の成美の所と稲荷此社をし出して坑ありて弁才天あり
此二ヶ所一ヶ所ハ宇賀女一ヶ所を浅場なるへきを宇賀女弁天
ある所に寛文延宝の比ハ明地にて大仏二尊の前にハ堂社
なし 銀常掛りけるを浅草の社地に浅場弁天あり浅瀬
の前に浅場あけるは何としむかし弁天山にありし古社を
今然めて遷座をし時かの古社を浅しゆの所に移し浅場
弁天として額をかけしものなるへし江戸きこ名弁財天の所に
浅草観音堂浅草西福寺浅草石浜總泉寺浅草今竜
山と書す江戸鹿子名所大全名弁天浅草観音堂浅草
今竜山聖天を載せり江戸砂子に及名古跡に江戸百
弁天南ホとして七十七番と載
石高麗狗二基　社前の石灯籠に立寄てこま高三尺四寸　出所
碑文

従享保十三申二月吉日奉納御宝前浅草町講中
石手水鉢　高さ二尺三寸五分横一尺三寸五寸ある
一尺五寸五分銘石盥盥元禄十三庚辰五月吉旦萬米姓
信方
三峯山権現社　弁天堂の東　高さ本社一間半四方　ちぢ
造庇にて棟同扇葉紙打枝の紋を画し　拝殿一間半にて一
間五尺造　額三額三峯山大権現木比稲　妻金字等ちぢ
ちちさき銘は銘なし　本社前拝殿の棟瓦にて三峯山の
三字をつけ又四隅の瓦にてことく〱はね扇をつけたり
白木造にて九尺四寸　横六尺五寸
鐘楼　弁才天の在北方坂の上り口にあり二間四方瓦棟南午馬丁
鐘高七尺口径三尺八寸五分厚四寸銘在のごとし
寛永丙子歳　大猷院家光公詣當山観音愛見伽藍敬壊

即命改作之凡三十餘所又於堂後林中創建　東照宮後
僅數歲民屋火起神宮仏閣悉為煨燼　公後命老臣某等
營造如神白爾呂還日桂月來年起四十凡雨祈侵寢至敗毀
今大樹幕下兼　北公之事起土木之功命山城守戸田忠
昌使十郎左エ門尉建部昌孝五郎左エ門尉　三浦　義威八郎
左エ門尉国領重清延事嗚呼結搆之崇　影飾之美仰
而可望俯而可欽功化之大豈可量哉其楼上所掛之鐘亦破
裂因改鑄之備後守　牧野成貞　善拾黄金二百両為常報十二
時之資糧鐘既作銘并序刻之銘曰鋊銅鑄鐘冶切已成撞
之撃之殷々雷轟　鐘本無音觸物能鳴觸者是何一切衆生
衆生一切種々音声音声種々唯一銅鯨々吼忽発迷夢頓
驚沉期薩埵威徳浄深識念改力恭称具名諸君解脱
悲願維明元禄五年歲次壬申八月武州豊嶋郡金竜山浅草寺

別当権僧正宣存拜鋳師深川太田近江大掾藤原正次

江戸ノ庶子名ハ大分ニ浅草寺弁天山ノ鐘ヲ年久しく無答
稲荷のうしろ歳踏ニ鐘ヨリ一しくしく銭を年ゝ不ハ入兵
ありて勝波世音の今れのかく二六の梵音妨悩の音を破り
也此鐘新ニ在る事世音の声ニ換ル事 横江戸
弘子江戸二六時中の鐘上野大仏下浅草寺弁天山本石
丁三丁め市谷八幡德兵門谷海山寺杉寺本石 横川
白木稲荷社 弁天寺ニ此所右の方ニ有り社三尺ニ四尺 額正一
位白木稲荷大明神ト木地ニ彫書今字等を志ある 朱ヲ
辰ヲ五尺七寸横四尺五寸
石階 石段十八級幅一間
石橋 石階の下池の水をわたすかくる長一丈六寸 横五尺
五寸
石燈籠二基 長キ正もの如く 高サ七尺七寸 石作 縁ニ寺献弁才天法宝前右

燈籠一双 新石 修造 渡辺吉三郎

手水鉢 弁天山の麓に立 高一丈 横八尺二寸

橋 弁天山の東南の小流池の横きれにかゝる 長一丈二尺

横三尺八寸

池 弁天山の北麓にたゝへたる

按ずるに先世弁天社前の手水鉢の従ハ今の松井源水に持つ弁天社前の大手水鉢を二つ立つべき地なりしとて日光本門主より松井源水へ給はりしものなり八角にして高さ二尺四寸五分 径口三尺八寸 差渡一丈八寸の差 ◎の紋 松井源水 源水を封じたりしや七十余年 源水弟子松井源水家に伝へあり

渡辺氏覚書に此辺に稲の人もありの覚あり 修理 叩程 六尺八寸

并観音の弁治の往来多くに出てしりを差し入れの端にお

とろき東西へもしられさなりて 蛾のやうなる石へきる

久米平内兵衛社 弁天山の下池の西なる社 九尺に

八尺あまり 石像之額 久米社 本社学書 鳥居 源賀言高群謹

をかゝるを記して事々をゆするしめ呈せる之

江戸砂子に此石形 額ならくハ鈴木正三石平左衛門の門弟にして

して二三世禅の形なるべし力を記し又ハ擁ニ挨夫の形をと

かゝる必然なるをいふ 再校江戸砂子に久米氏ハ九州の

大名につかへし浪人にして当地内に到れハ信心して住し石形

ハ元禄七八年の比自ら造立せしハ中文錦辺正刻あれと下に

記しし門前当境内に石像あり 識者なりとせる久米平内の像に

誓願ありて信するもの平左衛門正三の門人なる二王坐禅の形をなし

らしめしもの云 人の云 正三ハ俗名鈴木九太夫といふ 平内左衛門

内藤丹後守の家臣なりしものいふなり 不知 九州の士といふ 江戸

熱廉子名所大全に此像を石平左衛門正三の門人仁王坐禅の

形なる此相の石像なれども錦辺正刻あれども識者あり

の内ところしもなれども未詳 明暦万治の比の人なれバ正三

流の禅者なるべし

按ずるに錦辺正刻ある石像ハ覚宝院といへる修験者の像に

係るところからしもしいふ 縁記に覚宝院ハ当寺の担

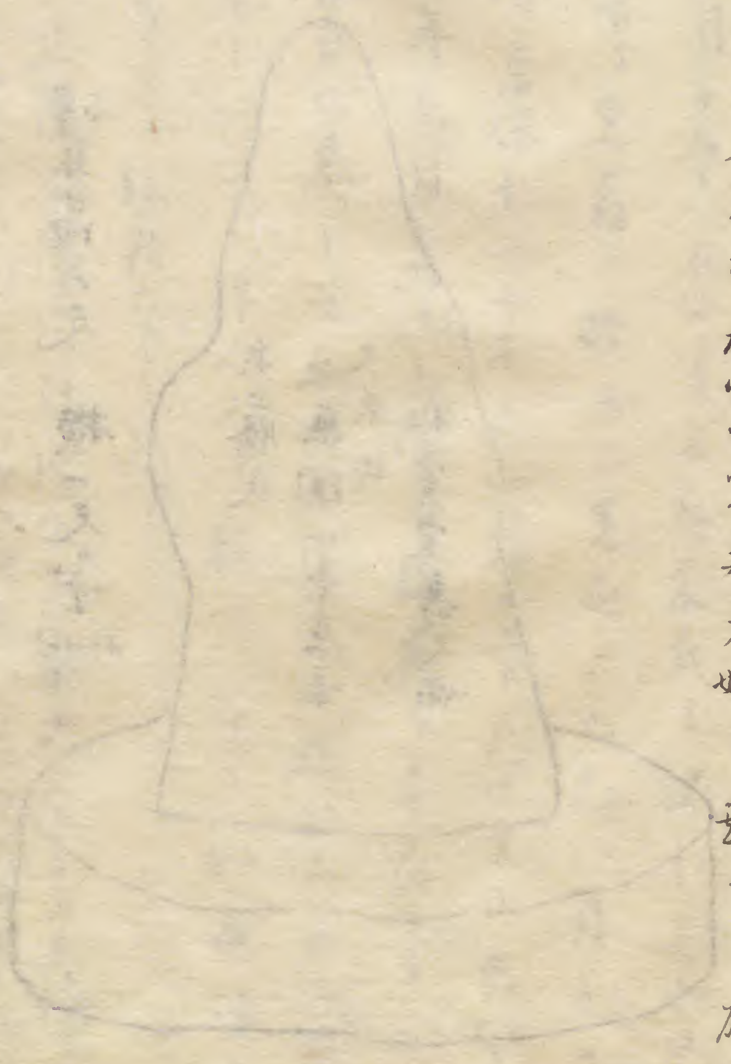
越

ろして神田に住せり生質勇荘にして物に屈せず妻もなく
子もなく言行一致の修験之大峯に入ること三十三度荒行
よく日る精力益かゝる人のなる仏説苦行をなすその霊験
神のめしつかの人ごとく生不動と云平生酒を好て飽まで呑し
常に酒の徳からきを言ひて万病を嗜へ又酒を割入
て呑住居何からしいへとも食を乞はず常に椒を以て之を言う
かき字へ来るを常に醉されても啼す一日自ら石像を刻て
来りて云其後後之とかうしときん者とらぶに是を許せ
ほしまに志しえ禄十五年正月十日卒と知れの中ろも
さ人石卒後人の内人ほろみを戒せす又瓶れ卒内に清とこ
印しうけ寸二分の説こくかなへし
瀬田内に江戸砂子橋に出ほ不皆委説之氏人来りもあり
去兵藤卒内に清今卒内に清に素に久米氏の女くの以下文

下の石像何体
后の下に見え
又云耳底銀に平内を清に青山の勝持ち云ふ也了地に居
山も銭を持ちらしこと云ひろうはたらしはき地に居させある
江戸府の様なし山本の杞をもたうやみ出へしとこ人の姿士
その後勇のそのなく今此像識字銘なき地ゆかしをとかふ
又いち或書にも首切もて前様に伝し千人を切りて供養
をなし後末九右衛門入道西山云寺に其中に石平石人を云田米の門人内殺二人死して後其
と称らく仁王せ様の法修行としとかり　以上出四四葉
石に中行久米社の前右外方に立立を大尺耳手横吉ある人立方は
一尺四寸西方に九と平の字を刻む石奉納持云新吉門前浄楽
にある浅草寺石の花法二尺
石像地蔵体久米社の小二尺のたしなにも立高さ一丈二尺
一寸五分ちもにき浅供奉塔江戸中古今子供既当二世同諸生霊生
代善提廊巻見抜大和尚領主子供次男地蔵坊法誉空厳
享保二十丙午八月十七日本石丁四丁メ寺田与左衛門福
田氏

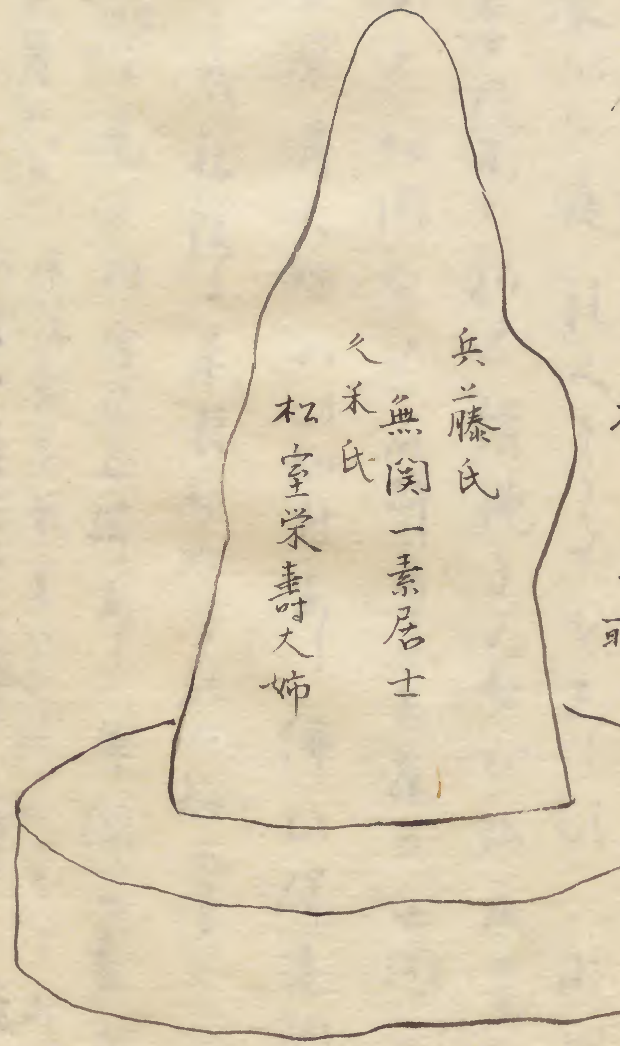
石像阿弥陀　石像地蔵の並ひ西の方に立高サ四尺七
寸　彫付　天和四甲子六月六日　無関一素居士　貞享二乙
巳天　松室栄寿大姉　十二月廿三日　良心一庭居士　按するに
無関一素ハ兵藤平内兵衛の戒名　松室栄寿ハ其妻久米氏
の戒名にいふ良心一庭　詳ならすといへとも家内同
養子平内か兼　菩提所ハ牛込鰻縄手大智山海蔵寺に従
寺にまさき生石の夫婦同竿の石碑あり　兵藤氏無関一素
居士久米氏松室栄寿大姉如此切付あり　係此碑兼内存
生の内　建立せし哉　死後に年月切入されハ知さるそ　武
等の石像ありし後に見又内竿の石碑あり　無関一素居士
天和四甲子年六月六日　辞世ハ天和三年にありし　これも年内兼存生の時立置きた
るを後に年月を彫入るゝ時誤るなり　松室栄寿大姉貞享二乙巳年十二月
十三日かくのことし

按するに牛込鰻縄手大智山海蔵寺兵藤氏の墓石　兵藤
氏無関一素居士　久米氏松室栄寿大姉と刻せる碑の



駒込海蔵寺兵藤氏夫婦墓図

碑身高三尺　横一尺九寸



礎高六寸五分

側小の方に並て一碑あり右より三線の銘を彫る其寺
山一豊居士明和二乙酉年八月七日　端然妙正大姉宝暦
九己卯年四月十二日　右の方に兵藤氏と記し又小の方に
並て一碑あり書して覚翁一睡居士寛延二己
空了寂大姉享保十一丙午年四月十二日　左の方に良切童子
寛延二己巳年十一月十七日と記す此海蔵寺右三碑
何れも兵藤氏の墓にして平内兵清の子孫ハ今九代目にて
兵藤安兵衛といひし頃人なり　糀町三丁目加藤孫兵衛
尼も尼を仕へて住み居たりといへり

石像正観音　立像石像河原院の並南の方に立像高四尺
一寸　光背右　蓮華の浴植善院日□□□居士祖然禅定門□□秋月禅尼三悦禅定□誉
□□□□□□入信士□屋□清信女是□□□□□寛入信士高
村信女妙円信女□□信女天野奥右衛門妙玄覚法□□松□□□□□□□□小ち□容□□□禅
定尼涼雲知秋禅定門貞得玄□□□□□貞誉□□信女

石像地蔵　石像観音の並南の方に立像高三尺六寸

[seal]

左ニ 銘蓮花の銘

□□□法出丁□兵衛□右ハ木月諱□信士無□照心禅尼允
誉明心信女□□忠□信士□□□□信士□□□無信女□心□□
信士休意居是妙意及図照海妙林信解院釈如法□貞岳智
善宗心智三法を□□住吉丁寺納□仲右衛門かかるかかる
おなし様ハ｜

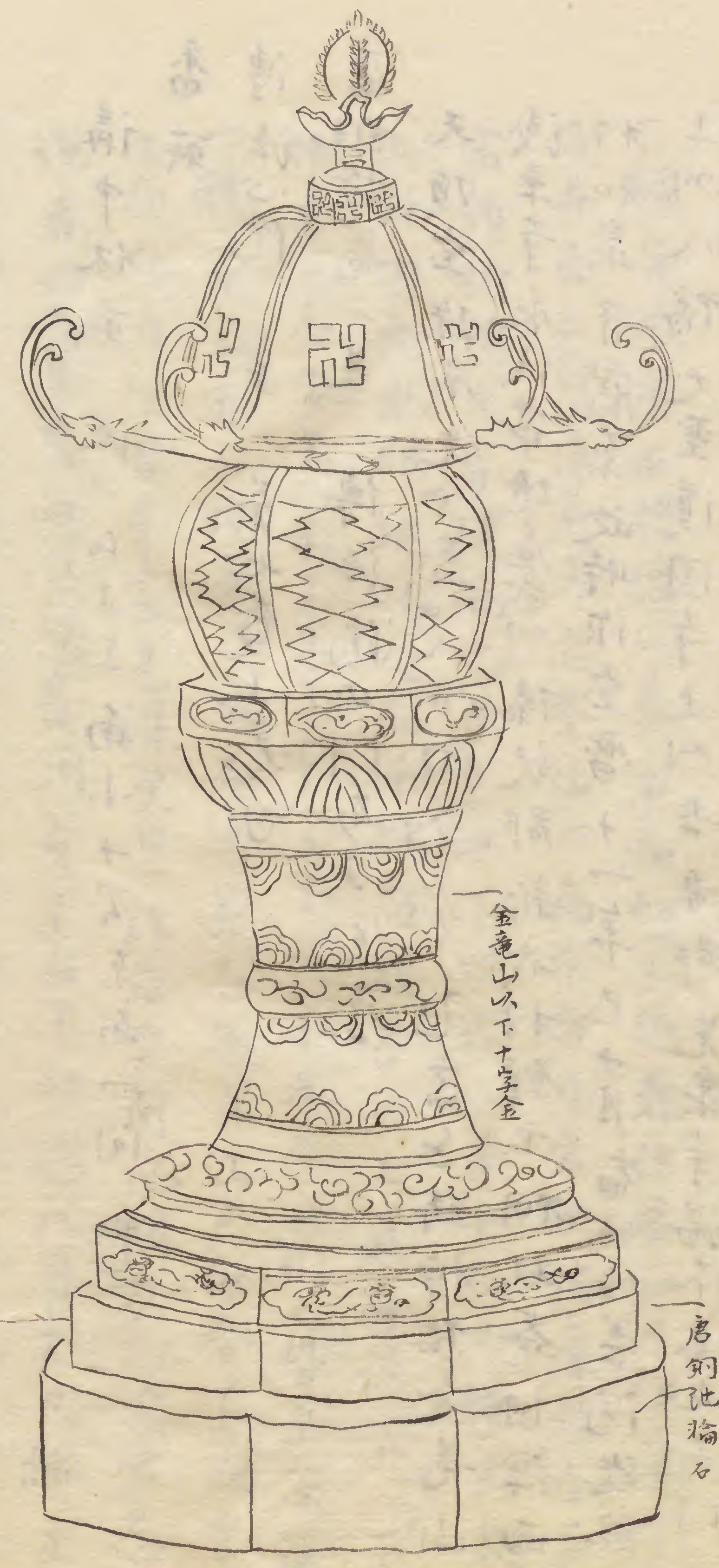
石観音地蔵左ニの下石手水鉢礎ニ二像を並て作之
同銘六十六部 天下太平と立 三十七名あるとと磨滅す
石像阿弥陀 立石像 地蔵の並南の方ニ立 立像高九尺
七寸 左ニとも
唐銅像観音 二王門外東ニ立 坐像長一丈五寸 蓮花の
園一丈八尺銘奉鋳冶金銅盡観音索多之像一軀右善願
之意趣者昔日主人成井善三郎住居江戸伊勢丁法名念
誉祐心余自弱冠之頃奉仕祐心祐心視予猶父也其恩深
厚矣因茲為報主恩所起立也伏願酬此功徳焚魂忽去苦
域速到楽邦而已貞享四年次丁卯八月十九日願主東
上野邑楽郡皷林大久保村高瀬善兵衛直房敬白 堀江丁

三丁目取次近江屋善兵衛利長 神田鍋丁東横丁藤原太
田久右衛門正俊 蓮花の上香爐立七寸三分横四寸三
分高五寸銘奉献宝暦十二壬午七月十七日門前石屋五
郎兵衛
唐銅像勢至 観音の並ひ南ニ立 長一丈五寸 蓮花の
園一丈八尺銘奉鋳冶金銅大勢至菩薩之像一體右志趣
者余主人之金友成井次郎助悼予猶兄也以故営造此尊
像以謝彼恩泥焉翼吾家兄現世願望随意當來瑞蓮座跛
矣耳肯貞享四年次丁卯八月吉祥日東上野邑楽郡皷林
大久保村高瀬善兵衛直房敬白施主願主金竜山善能院
堀江丁三丁メ取次近江屋善兵衛利長神田鍋丁
東横丁藤原太田久右衛門正俊 蓮花の上香炉立七寸
三分横四寸三分高五寸銘二菩薩香爐一対為就□六ニ

忠宗　右二尊下の石壇南北六間　三尺三寸五分
東西三間二尺五寸　高五尺三寸　上の石垣より二尺　石燈籠
一基観音の前にあり七尺三寸　銘奉濤治金銅之聖観世音菩薩
一軀并宝前石燈爐一基　右励勉志趣者住居江戸伊勢丁
成井吉三郎法名号念誉祐心為亡者日主欲報厚恩全遂
常願祈證大菩提首也貞享四丁卯天八月十九日　願主東
上野国邑楽郡鉞林大久保村高瀬善兵エ直房謹言　石
燈籠一基勢至の前にあり七尺五寸　銘奉造立金銅之勢至菩薩
一體并宝前石燈籠一双　石懇善志趣者江戸伊勢丁成井
次郎助為住昔弟蒙甚深重恩鎔茲哲謝佗惆欽仰現當悉
地者也乃至慈雨自他普潤貞享四丁卯捻八月吉日　願主
東上野国邑楽郡鉞林大久保村高瀬善兵エ直房敬白
石手水鉢　石燈籠二基の前にあり立六尺六寸　横二尺　五

寸高二尺一寸添石——
茶屋　弁天山の下　池の乾にあり
講中休所　池の西にあり　南北十間東西四間　西向之
番所
傳法心院　東へ八十七間にあり也
唐銅燈籠一基　傳法院の門前にあり
天頂宝珠厳先金蓋下以八方両全て　卍字を鋳　棹銘金竜山
浅草寺永代常燈台武州榛沢郡新戒村願主桐林菴祖禅西
村和泉守藤原政時作宝暦十一年巳十月宿坊法善院礎銘
上州八幡大聖護国寺上州吾妻郡先泉寺湯本安左エ門
山本十左エ門中沢忠左エ門　田村長兵エ　町田安右エ門　竹
渕助右エ門清水講中山田村中町田儀右エ門掲雲香貞

八方面中圓形



童女 昇字禅定門 田村太郎左衛門 田村吉郎兵衛 閑武左衛
門 治村角内 田村半兵衛 丸山蓮次 町田勘左衛門 中条下中
新井三左衛門 新井与一左衛門 木暮作兵衛 門系譲中 拾
人 中村治之助 同国豊岡常安寺草埒村中 東沢喜右衛門
田村孫左衛門 山口清右衛門 丈山田保右衛門 町田七郎右衛門 高
沢宗兵衛 方沼譲中 町田三右衛門 晴誉生蓮大姉 教妻保
定門 昇雲禄門 折田村中 小林 閑氏治村又左衛門 下沢渡村中
田村孫四郎 秦原十郎右衛門 若進寺矢治兵衛 村井
平六 小岡久米蔵 鈎持兵右衛門 市川甚九郎 同国里見士小金
殺右衛門 市川与右衛門 市川礼兵衛 中沢若兵衛 若福寺
山田次郎兵衛 町田兵右衛門 閑利兵衛 大井譲中 説誉法
顔居士 仏誉深入信士 切德現水岩女 田村太郎右衛門 上
沢渡村 守田村文右衛門 四方村中 清見寺 二宮半兵衛 二

宮次右衛門　顕徳寺　山口三郎兵衛　堀田太右衛門　東丁議
中　龍徳寺　矢倉村中　坂上次右衛門　湯本角右衛門　湯本紋右衛門
唐沢大和守　山田三郎右衛門　作間作右衛門　山田伊右衛門
門　下山田議中　町田茂右衛門　芳龍智曉童子　得心大徳淨
生禅定門　田村太右衛門　福田六右衛門　関　伊平次　宗本寺
二宮清右衛門　伊能八郎兵衛　神保平蔵　山口六郎兵衛　松井九
郎兵衛　田村半郎兵衛　川原村中　諏訪喜郎兵衛　矢倉議中三人　立
方東　諏訪利兵衛　恵永寺　富沢喜平次　岩下議中　廿人　松尾議
中　野口彦右衛門　金子清右衛門　内田彦次郎　橋　福沢八郎
口次郎兵衛　大笹村中　入沢久右衛門　篠原治郎兵衛　黒岩源
左衛門　山口治郎兵衛　山本武兵衛　関口村中　横尾村中　高橋
彦四郎　浅見太郎右衛門　丸山七太夫　須加尾村中　中沢四
郎右衛門　干川孫右衛門　林村中　小泉三之丞　三沢村中　一
場又右衛門　木曽清太夫　西山太郎右衛門　大村議中　水出

作右衛門　川原畑村中　橋詰喜右衛門　金子茂右衛門　作茂
権兵衛　篠原熊右衛門　大笹議中三人　入沢源之丞　今井村
中　金子三右衛門　篠原治右衛門　浅尺寺　芦生田村中　小林助右衛門
谷兵衛　桜井伝之丞　桜井七郎兵衛　橋付郎兵衛　赤山村中　篠
原氏　吉田孫兵衛　橋　佐藤七郎兵衛　一場源七　小池又右衛門　富
沢清右衛門　西上吉兵衛　天神議中　大智尾　林寺
富沢六左衛門　橋　与一　作茂喜右衛門　長野原町中
常林寺　滝沢三右衛門　熊川杢兵衛　黒岩角右衛門
横尾村中　山本久右衛門　黒岩源右衛門　小村内蔵
之助　道浄光円居士　坪井村中　荻原伝之助　湯本
作右衛門　大笹地小村　権之助　川原湯議中　田中
清兵衛　市場源一　小泉丑郎兵衛　本　伝八　山路
与平次　元山議中　小林喜太夫　橋詰治八左衛門　宮

深角之丞ゟ橋小太夫門路ヶ出ゟ助思又安太夫門
小谷村中千川小之進　橋本伊太夫門一場武之丞思
岩六左衛門日顕村中古屋角左衛門田中七之助本
界自浄大姉　坪平兵衛　仙議中与兵衛谷村中　中沢太
郎之進　町田市之丞　小林彦太夫門　吉田孫太夫門田中
長二ゟ一場吉左衛門　原田村中　以上南方　加部　桂太夫門
大柏木村中　岩井村中　川戸村中　中沢新左衛門　飯塚
九之丞　林昌寺　相原伊助　相原吉左衛門　青柳十左衛門
伊勢下中宮　深沢新左衛門　青山村中　茂木彦次郎　保
平太夫門　城川村中　上州群馬郡　戸塚清之進　戸塚平八
左衛門　戸塚八之丞　戸塚彦七　覚翁ゟ本庄十二栗沢今井太大姉　戸
塚兵七　茂木権太夫　三ノ倉村中　相馬久左衛門　坂ヶ衣彦
中沢源左衛門　石田八右衛門　飯野ゟ之進　一倉甚太夫門一
兵衛本之丞　石田村中　路村ゟ太夫門　野村ゟ左衛門　西野　村

彦左衛門　野村伝之進　野村茂右衛門　飯塚権之丞　内路八助
如意寺　飯塚伝右衛門　飯塚宇之丞　飯塚清八　平形　桂右
衛門　長年寺　中沢長左衛門　上宮田村中　中宮田村中
下宮田村中　常念寺　福田伊之丞　小野平左衛門ゟ深沢田
丁中　飯野六ゟ右衛門　上州碓氷郡　田沢　深瀬清兵衛　七中
剣持権蔵　土屋又議中　須藤彦作　一柳　野村吉之進中右衛門
平左衛門　湯浅友之丞ゟ字下孫右衛門ゟ字下甚右衛門　上州沼田大谷
七之進　林係右衛門　沼田町中　田権之丞　横山奉四郎　木原兵右
衛門　川端吉右衛門　以上南方　長谷川甚太夫　下沼田村　下牧
智村中　上州　郡　金井利之丞　金井前右衛門　飯島古信州
縣郡　小林宇左衛門　山岸六ゟ之進　山岸丈右衛門　清水新之丞
宇下今泉　月吉代内藤之字出　古賀八十八　大熊右衛門
門　大熊仙助　吉木彦右衛門　久保甚之進　田中右衛門　金子伝
八　田中采女　右衛門　飯松浦四ゟ之進　伝彦

観音寺上野吉兵衛矢倉孫之丞一宇津井手右衛門田村七左
衛門松林吉作藤兵衛右衛門茂木利右衛門牧瓜野右衛門田
村多々右衛門加ア安右衛門新花村中宇津井手之丞宗雅長
徳寺喜心右之丞康次又四郎木村村中須生市川甚右衛門
信州藤沢坂本喜吉宇坂伊右衛門岩次清右衛門縁方議
中野村作七右四作杉右衛門古平治之丞永井儀右衛門母小宮
甚右衛門坂本右衛門宇坂助九郎岩波八右衛門岩波甚右衛門福学伴中
田原金甚中村伊兵右衛門中沢喜右衛門武州榛沢郡
荒木久兵衛福沢藤右衛門下総市川経治三上村小橋太
右衛門江戸飯塚九之丞市川七之丞上口坂蔵行司之丞
以上西方上野吉兵衛到庄深沢孫士中村沢湖小鶴治助保春
元亨大姉上原宝右衛門東九作人保宗茂右衛門世鶴作平
北山東清之丞左兵右衛門四郎孫之丞写坂六之丞宗清達
右衛門塚路谷七郎以次本省東右衛門多東熱之丞東小佐右衛

門市川七郎次桂栗村中沢川議中両沢之浦不揃何右衛
門宇津万吉細村勘右衛門岩城作之丞内海保甚右衛門上野
郡五庚作徳之丞江戸塚奥右衛門江戸塚平八郎村政甚照妙
智大姉塞清貞松大姉飯塚七右衛門飯塚藤右衛門飯塚作
之丞桜沢平右衛門和泉飯次右衛門作蔵飯右衛門小沢久右衛門
吉五吉之丞和長信寺小野子村中村上議中横坂議中上
州利根川下アア平荒木村名右衛門木村六之丞鳥坂長右衛門鳥坂照
右衛門自照心月居士相又村中留木市之助留木喜右衛門
午口徳助厳誉欣誉武州須谷伴一右衛門錦井勘右衛門之称
道右衛門安如流貞心大姉右照流恩仙智宝居士内山元助宗
路之宗伴蔵又右衛門小川郎之丞表山西之清仟宮是右衛
東上州荒木久兵衛福沢藤右衛門枇名言小磯今右衛門須
永新照杉村議中立石寺以上西方上州新田利根郡須田四十右衛門
同塚右衛門娘万吉助之徳吉上野吉兵衛小林横之丞読学記

萩原、孫右衛門 二宮清兵衛 同平八 嶋村七郎右衛門 中沢喜右衛門 堀井
宮沢甚右衛門 赤坂讃中 五人扶持 佐右衛門 山本甚右衛門 同清之丞 出口
三郎右衛門 同 野郎右衛門 鈴沢金右衛門 南沢三角 木宮善右衛門 右内
与一右衛門 吉川久助 何右衛門 同伝之丞 並木 野口弥一兵衛 紀之丞
横右衛門 戸塚九八郎 藤本源之丞 風倉寺号大坂 堀口吉右衛門 須賀
喜助 同万之丞、 内田吉信 同永井伝七 同いつ之や次右衛門
以上西小方 勢州 仲間若兵衛 依之丞 田所梅之丞 中村清之丞 江村 木村田中
六左衛門 上野 松生村 名四兵之丞 向田喜之助 丹州 相龍大姉 懐中慈照
兵士 武助 椿沢郡 杉坂伝三郎 村田猪之丞 以上 浅右衛門 川口梅太兵
門 清水市郎右衛門 武政喜右衛門 忠如院 要山良心大姉
智宗 藤士 武政十三郎 同半右衛門 宗如宗伝 同丈右衛門
青山兵之丞 賢兵郎 清名伝一右衛門 熊谷 内山織部 大谷浅右衛門
右衛門 村田吉 新成 村中 武政右衛門 小川伝一右
兵衛門 西原要助 村岡清門 大黒小沢市郎 之丞 平兵衛

半之丞 村田七右衛門 村田万右衛門 宮森寺 武政仁助 安兵衛
児玉木八右衛門 伊丹新兵衛門 川田伝一右衛門 武政喜之
丞 並木平右衛門 以上小方 江戸月物乾 新 青松寺 瑞瑞光寺
堀木右京之丞 堀木利右衛門 山田半三郎 中須七郎之丞
伊勢屋喜右衛門 鈴木伝之丞 鈴屋喜之助 富山家内 白
木屋家内 天野梶之丞 安之助 与須 内太夫 西村宗
八 越月屋家内 伊勢屋半之丞 西村和泉 安事 伊勢屋又
右衛門 海苔屋同右衛門 浅井九右衛門 町田安右衛門
山本太四郎 若狭屋九之丞 細谷右 上総屋昂人 須屋太
右衛門 之江屋長之丞 米屋彦屋喜右衛門 久保梶之丞 川越
屋利八 越前屋今井 蔵世到甚清 宝林田氏 おいえ 須田恵助 相模
屋喜平次 之江屋五之丞 布屋利右衛門 村田若次郎 江阿
若松 渡辺六之丞 小林幸十之丞 上野 相生村 名伝三郎

入江新右衛門　九右衛門　清六　長右寺法清寺門前清兵衛　河内
利兵衛　市川氏　伊藤氏　以上東小方
榎樹　傳法院門前
高サ丈五尺計　囲二囲半許　江戸庵子大樹　伝法院前にあり
往昔より五六歳千代を経しといふ　当時一の古木なるべし
二十軒茶屋　二王門前左の方　むかしは二十軒ありしといへり　此茶屋を茶屋と云ふ八
十六軒ありしより　四軒目　九軒め　十軒め　十五軒めの茶屋を
二軒を合せて一軒　十六軒ありしを一軒より　運上金毎月金
一分ヶ宛上る　名を付けし
四条丁三丁メ　笹本清吉　観音院地内　麹屋文蔵　正
智院地内　吉田屋宗次郎　此向寛政十年天明…　南馬道丁　稲屋
新吉清　二軒を今は　正智院地内　福屋吉右衛門　南馬道丁　蔦
屋伝八　自性院地内　橋屋てる　妙音院地内　河内屋孫

八　南馬道丁　扇屋小吉清　二軒を今は　南馬道丁　小松屋源
吉清　二軒を今は　南馬道丁　いせや源吉清　梅園院地内　よ
しや権次郎　南馬道丁　玉屋小八　金剛院地内　誠茶屋
万助　梅園院地内　蛯しや源七　町田屋　二軒を今は合せて当
画模江戸砂子に　観心茶屋　又お福の茶屋　今は水茶屋
といふもおなじ茶屋といひしをいつしか茶屋
茶を銭なしに福といふより　茶福と謂ふなり　六七年前まで
ては二ふくの茶をいれしとく同じく思ふ事
銭植に白銭を入れ二ふくの銭めせしとこれもちを
子にありとら茶碗の茶此銭を置て　おあらふ　又往
四神社仏閣の年あり　山福ありしいふもの　あ
るくも命にかへの石を振りいつまでも茶碗の人福と見
て挑ぬこてこらし　あるき諸すべきこと　此茶屋も　又

ゝの数ならぬ御目にかけ 江戸志に云女の髪結を
ま結ふ事は寛政のころ始まりし 御府の宗名もいはれし只
楊の茶屋とこは境補訛拾不名集に二十間茶屋なり元来小茶
屋之常数坡なり 南谷 二丁目ハ風雷神門へ出る前を東側とい正智院梅園院前大伝門浅草寺西側まで 今云伝法院前西側也
南馬道丁 正智院の小より 清鹿院前大伝門の南の通
をいふ 江戸鹿子に浅草寺の内小路なり東は浅草の川
浅草北内東へ広小路出来せし 弁天山下新丁千手
剣持といふ寺院 門前常言門茶屋の町なりかくしあり
両替江戸砂子に浅草寺内東の店とて僧に大なる
といふ明暦のころ吉原へ出しものとなりかくる頃 並来の
所に弁財天 両所江戸鹿子にあり
所浅草寺境内茶屋多し 江戸志にいる所
大坂といふ 此辺寛文延宝の比は 担来りし頃類蔵なる
まで来る人へ帰るのたかまる事なし 故に名とする之 明治
三年吉原丁を移しちりへうつさん 其の余あまりしに正
月の出来より そのまゝ追ひす 是等浅草に写しつる江
戸砂子に明治のころ吉原へ 近世吉原へ 三浅
まし とらは語へ江戸志に 様ふへし
草寺境内にて茶屋とて名の残れるは 三谷より直路あり
かこへ 土元朝観馬の中にかし所中 共角 十年より
銀杏をむけに葉つるほど 口 右の旬に 出しよりとこいつまでも
三谷よりのよりを日本堤に 見て通ふとよもぎふ 赤人を
十年よりといひ 姫宮に つきて楊枝として行口屋の者を
所るといふもむかしの 道なり 境補訛拾不名集に 此
内より 揚り出る 若か以道へとか さいもとは江戸屋 町が屋とは東側の 角の家かとも 江戸東の方より 屋敷ありし 所
新丁 南谷の新丁ゝ小側の町をいふ弁天此地を町とする
まし 新丁とつく 此地を掛けられたる新丁の 始まり
文化 保 十五年 庚戌の秋 旧記の文たのむし

當山観世音境内新町石表観音堂永代為修復料助成享
保十三戊申年寺社御奉行黒田豊前守様へ以書附願上
右之願ハ新規之儀ニ付御吟味有之候以後再願来れ
然ル処同十五庚戌年八月晦日黒田豊前守様被仰
渡候則願之通被仰付候ニ付新町石之儀出路御門之様ニ
之修造以願之通被仰付候ニ付町石被出来
此事享保十五庚戌歳九月

達磨ヶ池又達磨ヶ淵 南鳥居下京ハ宝珠院東（現在宝珠院）抱屋敷の庭の池
之長二十三三間許横凡三間許広サ八九間許在宝珠院ニ而明七
年丁未（原子写土）下より此所ニ移轉し泉石風流を尽す 柳
の井同葉の芦行基稲荷之有境内ニ後を此坪三千六百
坪程ノ用所江戸屏子ニ（達磨ヶ淵同葉の芦）云し庭の辺ニ泉水を築く
芦なとありしを好事の人当京の園ニ名付ぬらし 今ハ是

縁も定かならねハ達磨ヶ淵と名付ぬれとも世の人ハ達磨ヶ淵と云
江戸砂子ニ達磨ヶ淵ハ葉茂りうしろに在 俗ニ大長屋と
云ふとも行基の詞しあり（当山の西方岡ニ行基のあしあるなくさくうるとして）續江
戸砂子ニ名水也（あしぶ上の方ニあしそう）龍淵ニ行基の芦ハ葉のしや長尾（行基の芦 達磨ヶ池の小のほとりにて）

柳の井 達磨ヶ池の西の方十三四歩ほとりニ在 井かはし
三尺六寸四方 深さ一丈四寸 傍ニ石の柵あり（あれとも） 柳の井
といふハ其ほとりニハなく此名井の事なと云

榉（ケヤキ）樹二株在 一株ハ池の西ニ在 一株ハ東北の方ニ在 共ニ大
木ニてこうれ枝く大木也

達磨堂 池の東ニ在 一間四方 額 坐禅堂（梅蔵主書）本堂学書白字（壇）
（宇書ニ壇の作字）

稲荷社 宝珠院抱屋敷の内 小の方ニ在 社九尺ニ弐間
観音境内用ニそかたいなりし哉 玉桓二年みとせニ入寺

石鳥居高九尺斗　横七尺許　額正一位稲荷大明神石額
あり　右を稲荷と指く
杦樹　社の左の方六尺許二股に分れ枝を挿あり
中谷　矢大臣門より荒川戸町へ出る所を以て小側は今
刹院　覚壽院　清壽院　妙壽院　顕松院　南側には自性院　妻院
院あり　依て中四と呼ふハ何ゆゑなりし
中谷惣門の址　顕松院の前に在　むかしハ惣門ありしとぞ
小馬場丁　矢大臣門より左の方中北門前丁之間南へ至る
をいふ
茶屋名を屋数　矢大臣門の前北側にて新屋　丁子屋　源意
法花屋　源兵衛　亀屋　柏屋　大黒屋　矢大臣門前名主小側　梅村新九郎屋
敷あり

當家屋敷　小野西側　當家久代典薬屋敷
小谷　矢大臣門より北門に出る所を以て西側を教壽院　不動院　成就院
延命院　徳成院　吉祥院　東側には医王院　修善院　泉蔵院　条
渡院　善龍院　何もなし
味頭門前町　松梅新町屋数の門前あり
常喜門前町　松梅常喜屋数の門前なり
北門　常喜門前の小橋しへを小谷　北惣門あり　前を北八
房の木戸より今ハ毎通り江戸にて北門前町さり
は四丁と云ありき
深川荒蔵十宅址　往昔者山本にて深川荒蔵　名湖十宅
保十八ゟし　妻名宮井　其角門人　木者庵　文峯　肝屋浅
草草　総門
笠亭商庵宅址　往昔鳥山にて笠亭商庵　前名逸志戒

一志　享保廿年乙卯改之　素竹　新又半為庵　杉本少菴門人

居溝子門

以上山内

圖書局文庫

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan